
月夜の浜辺

瑞原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の浜辺

【コード】

N1798H

【作者名】

瑞原

【あらすじ】

月夜の浜辺で拾ったボタン。僕と妹と秋の契約。思い出話。

『月夜の浜辺』

月夜の晩に、ボタンがひとつ。
波打ち際に、落ちていた。

「じゃじゃーんっ！」

「どうしたんだ、それ？」

どこかで見たとあるボタンだな。

と、ふと思い出される情景。

「あのね　　秋先輩にもらったの」

僕は、はっとした。

妹が頬を薄紅色に染めた笑顔と共に、僕にそのボタンを見せてきたのだ。

よく見なれた学生服のボタン。

「あたし、ずっと秋先輩に憧れててね」

「告白した、とか？」

恐る恐る聞いてみる僕。テーブルに置かれたマグカップを握りしめる。

卒業してしまうから、せめて自分の気持ちだけでも伝えたい、というのはよくあることだ。

「ううん。第2ボタン下さい！ って言っただけ」

「え、告白してないのかよ」

ちょっと拍子抜け。でもちょっと安堵して、マグカップから手を離す。

妹から視線を外して、リビングの掛け時計を見る。9時17分。

「してないよ。照れるもん。恥ずかしいもん。」

中学生男子の僕には、中学生女子の妹の気持ちはわからない。

もっとも、僕はもう学校を卒業したのだけど。

「秋先輩、ぶちってボタン取って、私にくれたんだ」

あいつもそんな力任せに取るなよ。まあハサミの用意はなかった
だろうけど。

「あのね、お兄ちゃん知ってると思うけどさ、秋先輩モテるじゃん。私の前に何人か、先輩とか、ボタン下さいって言ってたの見たんだけど、そのときは断ってたみたいでさ。で、だめもとで私も言ってみたら、私にはくれたんだ。制服のボタン」

自分が特別扱いされたと思って喜んでいいのか。

まったく、あいつも結構なことをしてくれる。

「お前　知らないぞ」

「え？　何が？」

「いまのうちに、やりたいことでもやっておけよ」

「な、何よ？　なんかあるの？」

僕は自分の部屋に戻った。

予想通り、僕の目の前で妹は破壊された。

あいつに、秋に、破壊された。

それを拾って、役立てようと、

僕は思ったわけでもないが。

なぜだかそれを捨てるに忍びず、

僕はそれを、スーツのポケットに入れた。

「お兄ちゃん　　なんで、助けてくれなかったの？」

か細い声で妹が言う。

「目の前で私が、たった1人の家族が助けを求めているのに、なん
で
」

僕は答えない。妹を見つめるだけ。

「ねえ、なんでよ？　ねえ、お兄ちゃんてば！」

ぼろぼろと大粒の涙を落としながら、僕の両腕を握りしめる妹。

僕は答えない。妹を見つめるだけ。

「あんな、ひとだなんて、」

妹の周りはひどく濡れていた。

赤い絨毯が、ところどころ深紅色に変わっていた。

「お兄ちゃん、助けてよ」

僕は答えない。妹を見つめるだけ。

抱きついてくる妹を放り、僕は立ち上がる。

倒れた妹のブレザーのポケットから、ころりと何かが落ちた。

金色の、学生服のボタンだった。

月夜の晩に、ボタンがひとつ。

波打ち際に、落ちていた。

「お前さ、あれはひどくねえか？」

赤い絨毯の部屋から出た僕は、近くで様子を窺っていた秋に話しかけられた。

「他人のこと、ぜんっぜん言えないくせによく言うよ」

「で、どうするよ？　これから」

「知らねえよ。好きにしろ」

僕はひどく疲れていた。

上から2つ目のボタンが外れた学生服を着崩した秋は、爽やかに笑う。

「じゃあそつするよ」

それを拾って、役立てようと、僕は思ったわけでもないが。

月に向かってそれは放れず。

浪に向かってそれは放れず。

僕はそれを、スーツのポケットに入れた。

僕は孤独になった。好んで孤独になった。

はずだった。

「お兄ちゃん、ただいま」

仕事が終わって帰宅すると、家の前に妹がいた。

「おかえり」

正直かなり驚いているが、平静を装う。

「お兄ちゃんに見せるのは初めてだっけ。どう？ 似合ってるかな、この制服」

そういえばまだ高校生だったのか。

「似合ってるよ」

家の鍵を開けて入ると、当然のように妹も入ってきた。まあいいだろう。

「あのね 契約が切れたの」

「うん」

「だから、帰ってきたの」

「うん」

「だから、また、一緒に、暮らしてもいい？」

「いいよ」

「ほんとに？」

「だからいいよって」

抱きついてくる妹を放り、僕は夕飯の支度をする。

倒れた妹のブレザーのポケットから、ころりと何かが落ちた。

金色の、学生服のボタンだった。

月夜の晩に、拾ったボタンは、

指先に沁み、心に沁みた。

「ん？　なんかあったか？」

砂浜に屈んだ僕を見て、秋が言う。

「いや、別に何も」

「そうか」

夜の海は静かだ。満月が煌々と水面に映える。

「今度は僕の番か」

「そうだよ。お前の番だ。よかったな」

「てゆかなんでこんなことじゃんけんで決めるんだよ」

「それが一番公平だからだろ」

「まあそうだけども」

「面白くなりそうだな、今回も」

「そうだな。お前よりも面白くしてやるぞ」

「ああ、期待しとく」

ふいに笑いが込み上げてきた。

これからのことを想像し、大いに笑った。

秋はそんな僕が可笑しかったらしく、2人で笑い合った。

月夜の晩に、拾ったボタンは、

どうしてそれが、捨てられようか？

引用：中原中也『月夜の浜辺』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1798h/>

月夜の浜辺

2011年1月26日08時18分発行